



# 新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要 Ⅳ

— 守山市山賀遺跡・小津浜遺跡 —

1987.3

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

## 序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕跡であり、大地に残された歴史資料であります。

この中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獣を追い求めた縄文人、新しく農耕をとりいれた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思えます。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて面的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに新守山川改修工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思えます。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ礎となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

# 例 言

1. 本書は、新守山川改修工事に伴う山賀遺跡・小津浜遺跡の発掘調査概要で、昭和61年度に発掘調査したものである。
2. 本調査は、水資源開発公団からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

## 滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
文化財保護課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
管理係主任主事	山本 徳樹

## (財)滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査一係長	田中 勝弘
調査一係技師	小竹森直子
〃	吉田 秀則
総務課長	山下 弘
総務課主任主事	松本 暢弘
〃 主事	泉 喜子

5. 本書の執筆・編集は、担当者の小竹森・吉田が行ない、文章末尾に名を付した。
6. 出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会にて保管している。

# 本文目次

序文	
例言	
第1章 調査の経過と方法	1
第2章 地理的環境・歴史的環境	2
第3章 調査結果の概要	4
第1節 山賀遺跡	4
第2節 小津浜遺跡	16
第4章 結語	28

# 挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 遺跡位置図	3
第3図 山賀遺跡（Ⅰ～Ⅳ区）遺構配置図	4
第4図 小津浜遺跡（Ⅴ区）遺構配置図	16

# 挿図写真目次

写真1 新守山川周辺航空写真	2
写真2 Ⅰ区第1面完掘状況（東より）	5
写真3 Ⅰ区第2面完掘状況（西より）	5
写真4 Ⅱ～Ⅳ区完掘状況航空写真（北東より）	6
写真5 Ⅱ区第1面完掘状況（南東より）	7
写真6 Ⅱ区第1面SB-2102	7
写真7 Ⅱ区第1面SB-2103	7
写真8 Ⅱ区第2面完掘状況航空写真（左上北）	8
写真9 Ⅱ区第2面土壌群（北東より）	8

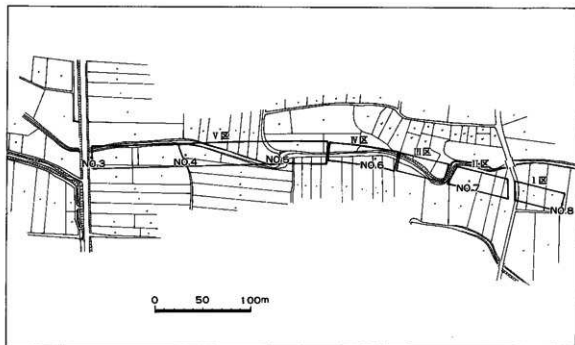
写真10	II区第2面SK-2208	8
写真11	II区第2面SK-2202・木棺検出状況(南より)	9
写真12	II区第3面完掘状況航空写真(左下北)	9
写真13	IV区完掘状況航空写真(左上北)	10
写真14	IV区SH-4103(北東より)	11
写真15	IV区SH-4102(南西より)	11
写真16	IV区出土土器	12
写真17~19	II区出土土器	13
写真20	II区出土和鏡	13
写真21	I区出土国産陶磁器	14
写真22	II区出土古瀬戸	14
写真23	II区出土青・白磁	15
写真24	II区出土砥石・土錘	15
写真25	V区上層遺構全景(北西より)	17
写真26	V区上層遺構杭列検出状況(東より)	17
写真27	V区下層遺構全景(西より)	18
写真28	V区下層遺構川岸高台部遺構検出状況(南より)	19
写真29	V区土層堆積状況	19
写真30・31	V区溝内土器出土状況	20
写真32・33	V区木製品出土状況	21
写真34~37	V区上層遺構出土土器	22
写真38~40	V区上層遺構出土鉄製品	23
写真41	V区下層遺構出土縄文時代晩期土器	24
写真42	V区下層遺構出土弥生時代前期土器(壺形土器)	25
写真43	V区下層遺構出土弥生時代前期・中期土器(甕形土器)	25
写真44	V区下層遺構出土木製品(舟)	26
写真45~49	V区下層遺構出土木製品	27
写真50	発掘調査作業風景	29

## 第1章 調査の経過と方法

守山市大門町から杉江町・山賀町を抜けて琵琶湖に至る新守山川改修工事の計画流路内には既知の遺跡が含まれており、昭和58年度に試掘調査を行ない、昭和59年度より発掘調査に入った。今回報告する調査は、湖岸から約300mの3号橋梁（No 3）から上流のNo 8までの河川内掘削に先立ち、昭和61年度に実施したものである。

調査対象地であるNo 3～No 8の幅21m×長さ500mの区間は、試掘調査ならびに昭和60年度の調査結果より、ほぼ全面に遺構が存在することが判明しているため、順次面的に精査を進めた。各遺構面直上まではバックホーによって掘削を行ない、遺構検出ならびに掘り込みは人力によって行なった。下流のNo 3～No 5 + 50mでは、湧水が著しく常時水中ポンプを可動させて調査を行なった。また、部分的に計画深度である4mを限度として深掘り・断割りを行ない、下層遺構の有無の確認・土層堆積の確認・土層堆積状況の観察を行なった。現地調査は、昭和61年5月7日～昭和62年3月25日の約1年間を要した。

尚、全長500mの区間を、遺構の時代・分布状況から、No 8～No 7 + 50m（4号橋梁）をI区、4号橋梁～No 6 + 80mをII区、No 6 + 80m～No 6 + 20mをIII区、No 6 + 20m～No 5 + 50mをIV区、No 5 + 50m～No 3をV区と呼称し、本文はこれに従う。（小竹森）



## 第2章 地理的環境・歴史的環境

山賀遺跡・小津浜遺跡の所在する守山市山賀町は、湖東平野の南西端にあり、市域の西方に広がる琵琶湖と密接に関連する位置にある。両遺跡は、従来より中世集落・弥生土器包蔵地として知られている。この章では、両遺跡を含む守山市の地理的歴史的環境を概観する。

御在所山を水源とする野洲川は、栗東町伊勢落付近から平野部に出て、大量の流出土砂によって三角洲を形成しながら湖岸に達する。現在野洲川は南北2流となっているが、かつては他に2条の主流旧河道が存在し、そのうちの1本が草津市との境界をなす境川の前身である。境川は現在幅3m程度の小河川であるが、かつては100m程度の川幅を持ち、杉江町・山賀町付近を流れる守山川・山賀川はその支流として形成されたと想定される。これらの中小河川の両岸には自然堤防がきわめて発達し、山賀町もその上に立地している。

守山市域では、赤野井湾遺跡の縄文時代早期の遺物包含層が最古であり、縄文時代としては他に吉身北・播磨田東・古高・服部遺跡があるが、遺物量は少ない。

弥生時代になると、生産経済の基盤となる水稻農耕に適した沖積地に遺跡が分布する。



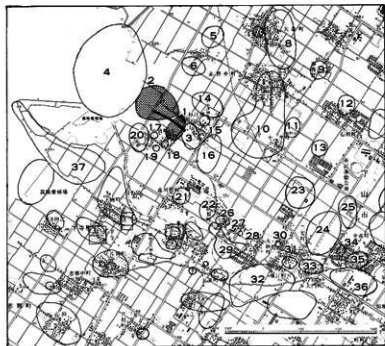
境川沿には小津浜・赤野井・赤野井浜・寺中遺跡、野洲川沿には前期末の水田が検出された服部遺跡が所在する。これらは野洲川の主流旧河道・中小河川によって形成された微高地上に立地し、その後背湿地や低湿地を利用していたと考えられる。

古墳時代の集落としては、竪穴住居群からなる吉身北・吉身南遺跡等があり、掘立柱建物で構成されると想定されるものには森川原遺跡がある。市内に所在する古墳には前期のものはなく、概して後期に属する。

白鳳期の瓦を出土する遺跡がいくつかあり、この時期にかなりの数の寺院が建立されていたと想定される。山賀町の北東約1kmには、南北・東西地割りを持ち、犬養郡の旧地として大和朝廷の直轄地と推定される赤野井遺跡がある。

中世の遺跡は現集落と重複するものが多く全容が不明であるが、杉江・横江遺跡において区画溝を持つ集落の姿が明かになりつつある。また、各地に蓮如にまつる遺跡が存在し、中世集落の存亡とも関連を持つと想定される。

全国的にみると、近江自体が交通の要所に位置し、その中の守山も東山道や北陸道への分岐点として、また近世においては東海道草津宿から中仙道の最初の宿場として栄えた。(小竹森)



- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1. 山賀遺跡    | 14. 杉江北遺跡  | 27. 歌賀寺遺跡  |
| 2. 小津川遺跡   | 15. 小津神社遺跡 | 28. 冬塚古墳   |
| 3. 杉江遺跡    | 16. 杉江東遺跡  | 29. 歌賀南遺跡  |
| 4. 赤野井南遺跡  | 17. 基方院遺跡  | 30. 栗田東遺跡  |
| 5. 弘明遺跡    | 18. 仁願寺遺跡  | 31. 三宅城遺跡  |
| 6. 赤野井西遺跡  | 19. 三茶寺遺跡  | 32. 横江遺跡   |
| 7. 観音寺遺跡   | 20. 山賀西遺跡  | 33. 大戸遺跡   |
| 8. 寺中遺跡    | 21. 森川原遺跡  | 34. 金ヶ森遺跡  |
| 9. 右衛門城遺跡  | 22. 歌賀遺跡   | 35. 金ヶ森城遺跡 |
| 10. 赤野井遺跡  | 23. 三宅北遺跡  | 36. 古岡遺跡   |
| 11. 弘明遺跡   | 24. 金ヶ森西遺跡 | 37. 鳥丸崎遺跡  |
| 12. 石田遺跡   | 25. 中島遺跡   |            |
| 13. 石田三宅遺跡 | 26. 歌賀城遺跡  |            |

第2図 遺跡位置図







写真2 I区第1面完掘状況(東より)



写真3 I区第2面完掘状況(西より)

## 2. II区(4号橋梁～No 6+80m)

耕土・床土直下より3面の遺構面が存在している。下層の2面は、淡黄褐色系の砂質土をベースとし、上層の第1面は、包含層上面をベースとしている。

第1面は、掘立柱建物・土壇・溝で構成される。最も上流にあるSD-2101から約40mの部分に集中する。SB-2101は、径約50cmの平面円形のピットからなる2間×2間の総柱の倉庫である。SB-2102は、2間×4間の掘立柱建物である。ピットは、径約35cmの円形のもので、15cm程度の礎盤を残存させるものがある。SB-2103も2間以上×4間の掘立柱建物であるが、ピットの平面形は、一辺約30cmの隅丸方形である。やはり、礎盤を残存させるものがある。

SB-2103の西側には、約20cmほど高くなった方形の土壇状の部分があり、ここには遺構は認められない。この高まりの造成土には多量の土器片が含まれ、東側斜面から和鏡の破片が出土している。





写真 5

写真 6

写真 7

写真 5 II区第1面完掘状況  
(南東より)

写真 6 II区第1面SB-2102

写真 7 II区第1面SB-2103

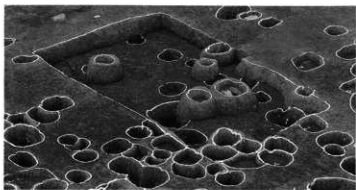


写真 8

写真 9

写真 10

写真 8 II区第2面完掘状況  
航空写真 (左上北)

写真 9 I区第2面土壕群

写真 10 II区第2面SK-2208

第2面は、上流側の約40mの部分にピット・土壌が極めて集中している。ピットは、北半により集中しており、北側に集落が広がると想定される。ピットは、径25～50cmの円形と一辺30～40cmの隅丸方形のものが混在している。礎盤が残存するものは稀少である。

十数基の土壌は、平面形によって楕円形・隅丸長方形・しっかりした角を持つ長方形に大別される。楕円形のSK-2205・2215は、深さ10cm程度の浅い皿状のもので、上面・埋土から摺鉢と甕が出土している。隅丸長方形のSK-2202・2209・2212は棺材あるいはその痕跡が認められ木棺を伴う土壌墓である。SK-2202では掘形一杯に木棺が収められている。深さ10cmほどしか残っていないため遺物は皆無であったが、SK-2712からは青磁碗が検出された。SK-2208・2216は深さ20cm程度の長方形の竪穴状を呈し、埋土は単一である。

第3面は、上層の2面で無遺構であった西側半分に検出される。SD-2301は、L字状のもので、この雨落ち溝内に掘立柱建物が存在する。SB-2302は、3間×3間の総柱の建物である。ピットは、径約30cmの円形である。SB-2301は2間以上×3間で、径約10cmの柱根が残存している。(小竹森)



写真11 II区第2面SK-2202・木棺検出状況



— 9 — 写真12 II区第3面完掘状況航空写真(左下北)



写真13 IV区完掘状況航空写真(左上北)

### 3. III区 (No.6 +80m~No.6 +20m)

当区はII区よりも約50cm低く、灰色の粘質砂土をベースとする。不整形の落ち込み状遺構のみが検出された。遺構内からは、土師器・黒色土器・国産陶磁器・白磁が出土しており、II区と同時期のものである。

### 4. IV区 (No.6 +20m~No.5 +50m)

III区と類似した灰色の粘質砂土をベースとする。上層は削平されており、同一遺構面に古墳時代と中世の遺構が検出された。

上流よりのSD-4101・4102は、灰色粘土を埋土とする中世の溝である。

中世の溝の下流側には、竪穴住居が5棟存在する。SH-4101・4102・4103と昭和60年度調査の1棟の一群と、SH-4105・4106がそれぞれ方向を同じくする。SH-4104が円形になる以外は、いずれも方形のものであり、4本柱になる。埋土からは、受口状口縁甕・高杯・器台が出土している。(小竹森)



写真14 IV区SH-4103 (北東より)



写真15 IV区SH-4102 (南西より)



## 5. 出土遺物

I・II区を中心とする中世遺構面からは、当時の日常雑器である土師器皿類・黒色土器碗を主体として、信楽・常滑の摺鉢・甕・炮烙等の調理具が出土している。また少量ではあるが、古瀬戸の小皿、盤、瓦質の小型三足羽釜、青磁碗、白磁の合子蓋も見られる。各遺構から出土する土錘には、褐色系で径約6mm、長さ約3cmの小型のものと白色系で径約3cm、長さ5cmの大型のものがある。土器以外では、砥石、鉄鎌、和鏡が出土している。これらは、概ね鎌倉時代後半～室町時代前半の遺物である。

古墳時代の遺物としては、IV区の竪穴住居周辺から出土する受口状口縁甕・高坏・器台の他に、各区の包含層から須恵器の坏・坏蓋・甕等が出土しており、当概期の遺構の存在が予想される。(小竹森)

## 6. 小 結

旧河道を挟んで杉江遺跡と隣接する山賀遺跡は、杉江遺跡とほぼ同時期である鎌倉時代後半～室町時代前半の集落であるとともに、下流より古墳時代前半の竪穴住居が検出され、歴史の空白の一部が埋められた。(小竹森)

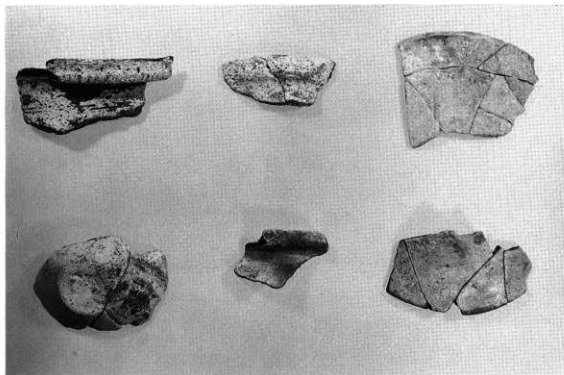


写真16 IV区出土土器

写真17 II区出土土器(1)  
第2面出土土師器小皿

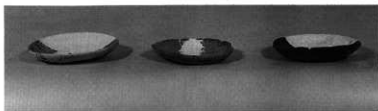


写真18 II区出土土器(2)  
高台造成土出土師質羽釜



写真19 II区出土土器(3)  
第2面出土瓦質三足羽釜

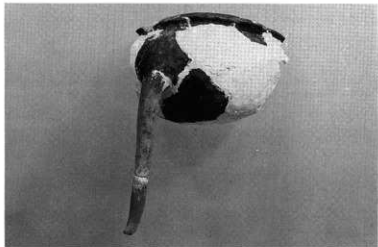


写真20 II区出土和鏡



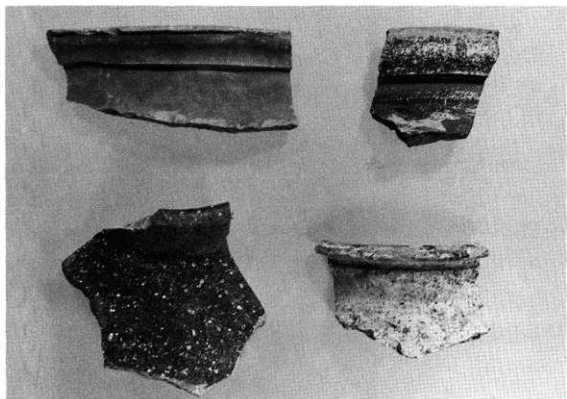


写真21 I区出土国産陶磁器

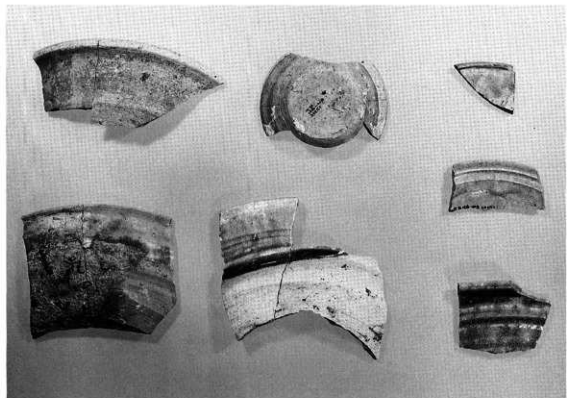


写真22 II区出土古瀬戸



写真23 II区出土青・白磁

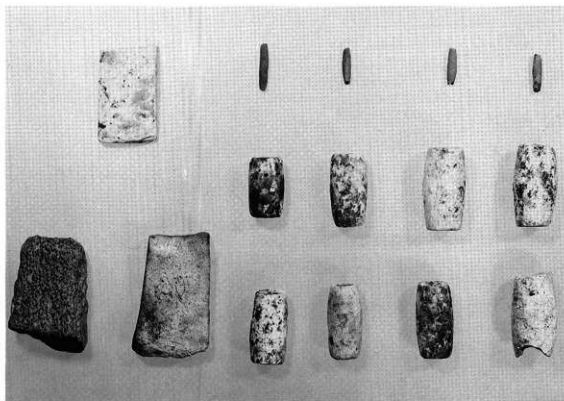


写真24 II区出土磁石・土鍾

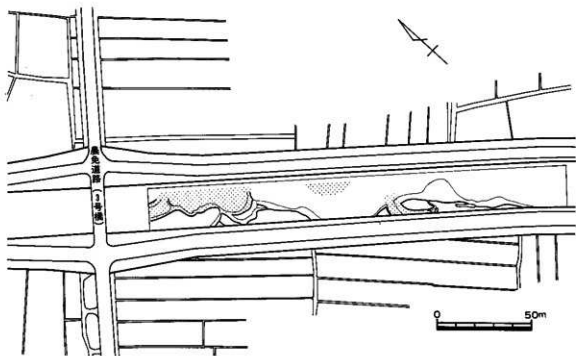
## 第2節 小津浜遺跡（V区 No5+50m～No3）

### 1. 上層遺構

当区は、これまでの試掘調査および関連発掘調査により、縄文時代晩期～弥生時代の旧河道が存在することが判明していたが、その上層にこの旧河道とほぼ重複する様に、古墳時代～中世の旧河道が検出された。

川幅は約30m、深さ2m以上になると想定される。河道はかなり蛇行しており、彎曲部にあたる部分には砂が溜り、中洲状の高まりが形成されている。埋土は、上層が灰色系粘土層、下層が灰色系砂層であり、主に下層から遺物が出土する。

調査区のほぼ全域が旧河道にあたり、若干存在する川岸の平坦部には旧河道と同時期の遺構は認められなかった。ただし、旧河道に付随するものとして、川岸の肩部と中洲の縁辺部の各1か所に、長さ20mの杭列が検出された。この杭列は、径約15cmの丸太杭と径約10cmの竹杭とで構成され、その比率は2：1である。これらの杭列は、護岸施設の一部になると想定される。（小竹森）



第4図 V区下層遺構配置図（アミ部分は弥生時代の旧河道）



写真25 V区上層遺構全景（北西より）



写真26 V区上層遺構杭列検出状況（東より）

## 2. 下層遺構

中世の旧河道直下において、多量の遺物を含む縄文時代晩期～弥生時代中期の旧河道・溝・ピット等の遺構を検出した。

調査区のほぼ全域にわたって検出された旧河道は、淡青灰色粘土・灰色砂礫のベースを切り込んで流れている。流路は中世の旧河道とほぼ一致するが、No.3+40m付近で北へ分岐する等複雑である。旧河道内埋土は、暗茶褐色粘質土層（以下スクモ層と呼ぶ）と細砂が混じる暗灰褐色粘土層で形成され、その間に灰色砂層・礫層が混入する。遺物はスクモ層から主に出土し、弥生時代前期～中期の土器・石器・木製品等多種多様である。部分的にスクモ層下に暗黒褐色粘質土が堆積する地点があり、縄文時代晩期の土器が含まれている。

調査区南側のNo.4付近とNo.4+60m付近では、上層の旧河道によって削り出された高まりが残存しており、溝・ピット等が検出された。また、弥生時代中期の方形周溝墓も検出されており、調査区外の南側へ遺構が拡がると予想される。（吉田）



写真27 V区下層遺構全景（西より）



写真28 V区下層遺構川岸高台部遺構検出状況（南より）



写真29 V区土層地積状況





写真30 V区溝内土器出土状況



写真31 V区溝内土器出土状況



写真32 V区木製品出土状況



写真33 V区木製品出土状況



写真34

写真34 V区上層遺構出土土器  
黒色土器・灰釉・土師器

写真35

写真35 V区上層遺構出土甕

写真37

写真36 V区上層遺構出土甕

写真38

写真37 V区上層遺構出土灰釉



写真38 V区上層遺構出土刀子

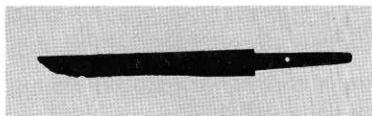


写真39 V区上層遺構出土刀子



写真40 V区上層遺構出土針

### 3. 上層遺構出土遺物

河道内埋土の内、川底に近い灰色砂層・黄灰色砂層・灰色粗砂層から古墳時代～中世の遺物が出土している。出土遺物の大半である土器類としては、須恵器・土師器・黒色土器が主体である。

須恵器では、坏・坏蓋・甕・甕が出土しており、これまでの調査では検出されていないが、当区から上流にかけての周辺に当該期の遺跡が存在すると想定される。中世の日常雑器である土師器皿類には、10世紀代のの字状口縁のものから、13世紀代の小皿・大皿が出土している。黒色土器碗は、大型で深く内彎するものが多い。黒色土器の底部外面に「二」の墨書を持つものが存在する。

この他の土器類としては、土鍾が多量に出土している。上流にある山賀遺跡の集落内で出土するものと同類で、須恵質のものもある。

木製品は少ないが、高台裏に「一」の墨書を持つ碗や曲物の底板が出土している。

鉄製品としては、木製の柄が残存し装着状態のわかる幅約3cm、長さ約30cmの刀子、刀身部分のみであるが幅2.5cmとやや細身の刀子、柄の部分も完全に残存している錐が出土している。(小竹森)

#### 4. 下層遺構出土遺物

出土遺物としては、弥生時代前期～中期の土器を主体として、縄文時代晩期土器・石製品・木製品である。

縄文時代の土器としては、口縁部および胴部に刻目突帯を貼り付ける深鉢が出土している。刻目文は横長の楕円形を呈し、口縁端部からやや間隔を開けて巡る。これらは概ね縄文時代晩期に比定される。

弥生時代の土器としては、下層遺構の中心時期を示すと想定される前期の土器の出土量が最も多い。壺形土器は、口頸部に段を有するもの・削出し突帯を巡らすもの・X字形の基軸に弧線を添えた形状の木の葉状文等、前期の中でも古相を呈するものと、貼付け突帯を持つもの・数条のヘラ描沈線文を持つもの等、新相を呈するものがある。甕形土器は、如意形の口縁端部に刻目文を加え、胴部にヘラ描沈線文を持つものの他に、内外面を粗いハケ目で調整するものもある。この他に、鉢形土器・蓋形土器や彩文土器がある。

石製品としては、磨製石斧・石庖丁・石鏃・剝片等が出土している。

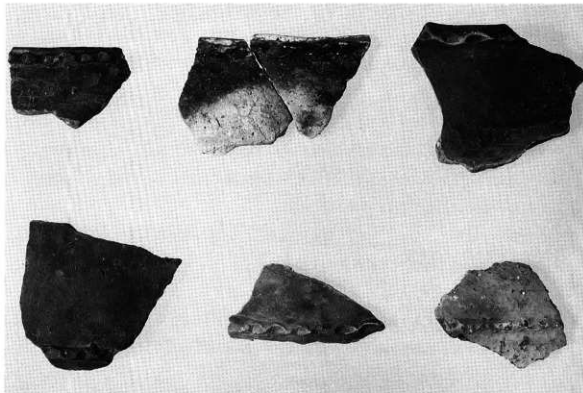


写真41 V区下層遺構出土縄文時代晩期土器

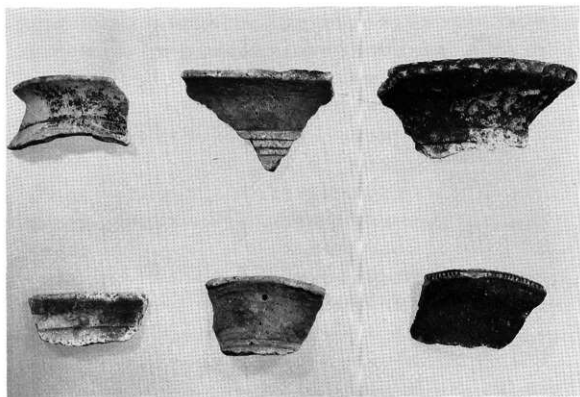


写真42 V区下層遺構出土弥生時代前期土器（壺形土器）

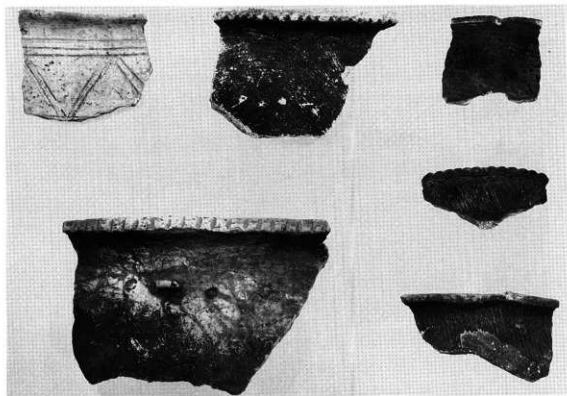


写真43 V区下層遺構出土弥生時代前期・中期土器（壺形土器）

旧河道内が適度な水分を含んで密閉状態にあったため、多量の木製品が良好な状態で出土している。棒状・板状の用途不明のものが多いが、鍬・鋤・田下駄の杵等の農耕具、斧柄・弓等の工具・狩猟具、高杯等がある。

鍬は、舟形突起を有する挟鍬の類で、残存約50cmの柄が装着されたまま出土した。鋤は、身の形状がスコップ状を呈し、鈍角的に柄の付くものや、身の形状が楕円形を呈し、中心部に方形の穴を穿ち柄と結縛する組合せ式のものがある。スコップ状のものは極めて薄手であり、相当な湿田で使用されたものと想定される。

斧柄は、長さ約40cmで一方が笠状に開き石斧の装着部を形成している。刃先が柄の主軸と平行になる縦斧であるが、装着部が穿たれておらず、未製品である。弓は直径2cm程度のもので、当間隔に桜皮を巻き付け、全体に黒漆を塗布している。残存長は約20cmで、両端は焼成を受け炭化している。県内では、長浜市鴨田遺跡出土のものがある。

高杯は、八の字状に開く脚部のみの出土であるが、外面に黒漆を塗布する。(吉田)

## 5. 小 結

当地区では、従前の調査で判明していた弥生時代前期～中期の旧河道と共に、その川岸に生活面を検出した。また、縄文時代の土器も出土しており、当該期の生活面も検出される可能性がある。(小竹森)

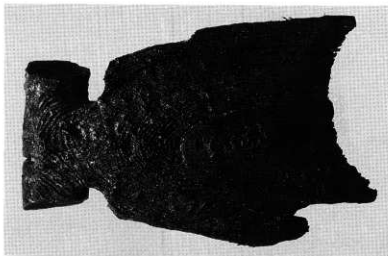


写真44 V区下層遺構出土  
木製品・舟



写真45 V区下層遺構出土木製品・鏃

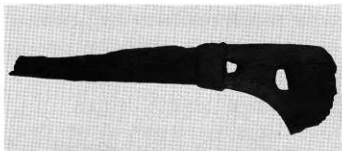


写真47 同上・斧柄



写真48 同上・斧柄



写真49 同上・弓

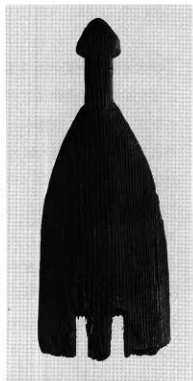


写真46 同左・鏃



## 第4章 結 語

今回の調査では、21m×500mの調査区内に古墳時代と中世の集落跡である山賀遺跡と縄文時代～弥生時代と中世の旧河道からなる小津浜遺跡の2つの遺跡が存在し、各々について多くの遺構・遺物が検出された。ここでは、今後各々の遺跡の性格を考える上であるいは当地域の歴史を考える上で検討課題となる点をまとめ、結語にかえたい。

山賀遺跡の中世集落部分は、旧河道を挟んで隣接する杉江遺跡とほぼ同時期にあたる鎌倉時代後半～室町時代前半を存続時期とする。

上層の第1面では、室町時代前半の掘立柱建物2棟と倉庫1棟が検出された。杉江遺跡では区画溝内の1単位において大型の礎石建物が存在するが、当調査区内では検出されていない。また、下流側にある無遺構の土壇状の高まりについては、その用途・性格は不明である。

鎌倉時代後半～室町時代前半の第2面は、極めて密集したピット群と土壇群で構成される。ピット群は切り合いが著しく、この面が長く生活面として利用されていただけでなく、建て替えが頻繁に行なわれていたと想定される。土壇群の内、平面形が楕円形・隅丸長方形のものはほとんどが木棺を伴う土壇墓あるいは蔵骨器を伴うものであり、一部は屋敷墓になる可能性もあるが、あるいは墓域として意識されていたとも想定される。杉江遺跡でも、各区画内に屋敷墓を伴うと共に、ややはずれた場所に土壇群が存在しており、集落内における墓制・墓域の在り方が問題となろう。

鎌倉時代後半の第3面でも掘立柱建物を検出しているが、区画溝的機能を持つ溝・堀や、それらに囲まれた高台部は検出されていない。調査区が幅21mと限られているためでもあるが、これらを具える杉江遺跡との構造的差異が存在する可能性もあり、隣接する同時期の集落間の比較検討から、各々の集落の持つ機能がより鮮明に浮かび上がると想定される。

小津浜遺跡の下層遺構面では、縄文時代～弥生時代中期の旧河道およびその川岸の生活面が検出され、多量の遺物が出土した。中でもその主体となる縄文時代晩期から弥生時代前期の土器は、層位的あるいは出土地点・出土状況の検討、土器自体を分析することにより、過渡期における両文化の移行のあり方の一端が明らかになる。ま

た、多量の木器は当期の生活様式をより豊かに蘇らせるものであると共に、水田農耕の技術的復元にも一助を与えよう。

遺構に関しては調査途中であり、断言することはできないが、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が多量に出土することから、より下層に当該期の遺構が存在すると予想される。近年の湖岸・湖底遺跡の調査により、縄文時代後期・晩期～弥生時代前期・中期の遺跡の検出例が増加し、当遺跡もその1つと言える。琵琶湖東岸を見ると長浜平野、入江内湖周辺、大中の湖周辺、服部遺跡以南の湖岸沿いには、従来の認識よりもより密に当該期の遺跡が存在している。これらは、個々が単独で機能しているのではなく生活の場である集落、生産の場である水田、墓域等が一体となって、更には集落間が互いに関係しながら存在していたことは言うまでもない。山賀遺跡の存在する湖東平野南半の湖岸沿いも当期の大集落である服部遺跡や方形周溝墓群・玉造りの遺構を検出した烏丸崎遺跡等赤野井湾沿岸を中心として遺跡が密集している地域であり、点を線に、線を面に拡げ、各遺跡間の関係や集団の在り方を解明していく上で、多くの示唆を与えてくれよう。(小竹森)



写真50 発掘調査作業風景

新守山川改修工関連遺跡発掘調査概要Ⅳ  
— 守山市山賀遺跡・小津浜遺跡 —

---

昭和62年3月

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121

内線 2536

勸遊賀興文化財保護協会

大津市瀬田南大賞町1732-2

電話 0775-48-9780

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台3番18号

---